

Nationalsozialismus はどう訳すべきか : 近年の訳語問題をめぐって

小黑, 康正
九州大学

<https://doi.org/10.15017/7348044>

出版情報 : 九州ドイツ文学. 37, pp.1-20, 2023-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン :
権利関係 :



Nationalsozialismus はどう訳すべきか

——近年の訳語問題をめぐって——

小黒 康 正

一

ナチス・ドイツは、アドルフ・ヒトラーが一九二〇年二月二十四日にミュンヘンの「ホーフブローイハウス」で二十五か条の党綱領を出した時点から始まり、一九三三年一月三十日の政権掌握、一九四五年四月三十日午後三時三十分頃のヒトラー自殺を経て、同年五月七日における全面降伏をもって終焉を迎えた。ナチスをめぐる問題は、一九八〇年代後半のドイツにおいて歴史家論争に火をつけたエルンスト・ヘルマン・ノルデの言葉を援用すると、「過ぎ去ろうとしない過去」^①としていかなる問いを私たちに今なお突きつけ、そして今後も突きつけるのであろうか。ナチス研究はドイツ国内は言うに及ばず、世界各地でさまざまな研究が数多く世に問われ続け、西洋現代史研究において最も厚い分野になっている。いずれの研究からも「ナチスの犯罪は相対化しうるのか」という問いが通奏低音のように聴き取れよう。別言すると、終戦直後のドイツ人集団犯罪論において顕著であったように、ドイツ人だからこそホロコーストを起こしたのであろうか。やはり、ナチズムはドイツ特有のイデオロギーだったのか。それとも西洋近代が生み出した（たとえ傍流であるにしても）一つの思想的な帰結なのか、いやそれどころか世界各地で起きた大量殺戮の一つにすぎないのだろうか。

ナチスをめぐる問題は、私たち日本人にとっても決して他人事ではない。ナチス研究の「機能派」が重視したナチス・ドイツの政治的かつ経済的な権力構造も、ナチス研究の「意図派」が重視したヒトラーという特異な人物も、ヒトラーのカリスマ的支配を支えた「総統神話」や「シンボル政治」などに顕著なナチスの疑似宗教性も、いずれも戦時下のみならず、戦後や現代の日本における政治や社会にも指摘される要素だからである。それらを特殊ドイツの問題として片付けることはできない。^②その上で、私たちはナチスをめぐる問題をどのように捉え、どのように後世に伝えていくべきなのであろうか。日本においてナチスもしくはナチズムに関し

て多様な研究があるにもかかわらず、私たちは一つの問題でいまだ躓いてしまう。それは日本特有の問題と言ってもよいかもしれない。端的にいえば、Nationalsozialismusの訳語をめぐる問題である。このドイツ語を、カタカナで「ナチズム」と表記するのではなく、漢字を用いて日本語に置き換えようとした場合、どのように表記したら良いのであろうか。同様の問題が政党名であるNationalsozialistische Deutsche Arbeiterparteiの訳語をめぐることもあると言えよう。前者に絞って言えば、一九三〇年代から現代に至るまで、「国家社会主義」「国民社会主義」「両者の併記」「その他」といった概ね四つの表記がある。ナチス・ドイツが日本で注目されるようになったのは、一九三〇年九月におけるドイツ国会選挙の際、ナチス・ドイツが第二党になったときであった。この躍進した政党のことを、『読売新聞』一九三〇年九月十六日朝刊は「国粋社会党」と、『大阪毎日新聞』の同日朝刊は「国民社会党（ファシスト党）」と呼び、一九二九年から一九三一年までの間にドイツに留学してナチス・ドイツの動向を批判的に日本に伝えた新明正道は同党を「国家社会主義独逸労働者党」と訳した上で「国家社会党」とも、さらには「国民社会党」とも呼び、ナチス・ドイツに多大な関心を寄せた石川準十郎は件の政党名を「国民社会主義独逸労働者党」と訳した上で一九三四年三月に第日本国家社会党を設立したのである。⁽³⁾

こうした訳語の不統一は一九三〇年代にとどまらず、現代においても続いており、事態はほとんど改善していない。この問題に関する近年の重要な見解をいくつか示そう。すでに一九九四年の時点で佐藤卓己は「Nationを国家と訳す（悪しき！）慣習」があるために生じる「弊害」を以下のように指摘していた。

そのため「ナシヨナリズム（国民主義）」を「国家主義」、ナチズム（国民社会主義）を「国家社会主義」と訳す弊害が生じている。奇妙なことに、ナチ党が唱えた「国民革命」は「国家革命」と訳すことなく、「国民社会主義」を「国家社会主義」と呼ぶ人々が残存している。この訳語は、これまで何度か訂正するように提起されており、さすがにドイツ史研究者が使うことは稀になったが世間一般では（特に辞書の責任は重大！）しばしば使用されている。⁽⁴⁾

さらに佐藤は二〇一〇年四月に行った講演で「なぜ、日本ではナチズムを国民社会主義と訳さずに国家社会主義と訳す人がいるのか」という問いを立て⁽⁵⁾、メディア史の観点からファシストの公共性を論じた二〇一八年の著作では「今なお我が国で国家社会主義と誤訳され続ける理由」として「そこには全体主義論でソ連共産主義と一括りにしたいという反共的な思想とともに、「国家」責任の逼迫

及して「国民」責任を問おうとしない心性が見えかくれしている」⁽⁶⁾と喝破する。また、ドイツ近代史、とりわけナチズム研究の専門家である石田勇治は、二〇一七年の共著において⁽⁷⁾、ナチズムを国家よりも国民・民族を優先する思想とみなした上で、やはり「国民社会主義」という訳語が原意を正しく表しているとみなす。さらにナチズムに関する著作が多いドイツ文学者の池田浩士も、二〇二二年の著作において、ヒトラーが「インターナショナルリズム」に基づく社会主義革命ではなく、「ナショナルリズム」に根ざした社会主義のための革命、つまり「国民革命」を目指そうとした⁽⁸⁾こともあり、同時代の日本では「国民社会主義」が当然の訳語であったにもかかわらず、戦後民主主義の日本において肯定的なニュアンスをもつようになった「国民」ではなく、大日本帝国のイデオロギーを想起させる「国家主義」の「国家」や「民族主義」の「民族」こそが「悪の権化であるナチズム」と結びついたことを指摘した上で、ヒトラーの政党が「国家社会主義ドイツ労働者党」もしくは「民族社会主義ドイツ労働者党」と呼ばれるようになったと言う。⁽⁹⁾ドイツ現代史の専門家であり、ドイツ義勇軍運動に詳しい今井宏昌は、近年のドイツ現代史研究ではNationalsozialismusを正式名称で訳す際、フェルディナント・ラッサールやソ連の「国家社会主義」Staatssozialismusと区別するという意味も込めて、「国民社会主義」とするのが一般的であると認めつつも、例外としてジェフリー・ハーフ『ナチのプロパガンダとアラブ世界』（星乃治彦ほか訳、岩波書店、二〇一三年）を挙げ、同書では「民族社会主義」で統一されている点を指摘する。同書の訳出に加わった今井自身によれば、Nationalsozialismusが国民国家の枠内におさまる「ドイツ国民」「本国ドイツ人」のみならず、その枠外の「ドイツ民族」「民族ドイツ人」をも対象とする思想・運動・体制であることが重視された結果であった。⁽¹⁰⁾

このようにNationalsozialismusの訳語不統一に関連する指摘、いやそれどころか「国家社会主義」という訳語に対する批判が近年相次ぎ、「国民社会主義」が社会に定着しない現状を嘆く声すらある。⁽¹¹⁾こうした状況の中でNationalsozialismusは実際のところどのように訳出されているのであろうか。このように敢えて問うのは、「国家社会主義」という訳語に対する批判が相次ぐにもかかわらず、訳語不統一に関する調査がこれまでなされてこなかったからだ。そこで本報告は、Nationalsozialismusをめぐる訳語不統一の現状を明らかにするために、二〇〇一年以降に日本で刊行された関連出版物においてNationalsozialismusというドイツ語が実際のところどのような日本語に置き換えられているか、(一)まずは独和辞典で、(二)次いでNationalsozialismusに対応する各国語の訳語をドイツ語以外の外国語辞書で確認し、さらに「ナチス」や「ナチズム」の項目でNationalsozialismusの訳語が、(三)国語辞典、(四)百科事典、(五)教科書や学習参考書、(六)「ナチズム」や「ナチス」を扱う書籍などでそれぞれどのように表記されているのか、重要文献をできるだけ多く示した上で考察を深めていきたい。但し、訳語を決定する際に外国語系の辞書が大きな役割を果たすので、(一)と(二)に関しては二〇〇〇年以前に出版されたものも示す。

二

アードルフ・ヒトラーは一九一九年一月に設立された「ドイツ労働者党」Deutsche Arbeiterparteiを一九二〇年二月に改称して、Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterparteiを立ち上げ、一九二二年七月に第一議長に就任し、次第にカリスマ的支配を確立していった。この新たに改称された党のイデオロギーであるNationalsozialismusは、日本語に訳出された場合、通常「ナチズム」とカタカナ表記されるが、漢字ではどのように表記されるのだろうか。先に述べた一九三〇年代前半の新聞報道の党名記述に基づいて言えば、「国粹社会主義」「国家社会主義」「国民社会主義」という三通りの訳語が想定されるが、池田浩士は「民族社会主義」「国家社会主義」「国民社会主義」という三通りの訳語があると述べており、ナチス・ドイツの時代に日本では「国民社会主義」と訳すのが圧倒的主流だったと言う¹²⁾。それでは、Nationalsozialismusを訳出する際の基本的な拠り所となってきた、独和辞典においてはどのように表記されてきたのであろうか。日本で出版された代表的な独和辞典におけるNationalsozialismusの項目表記を「二〇〇〇年まで」と「二〇〇一年以降」とに分けて示そう¹³⁾。

二一 独和辞典

二一一 二〇〇〇年まで

- 1 『雙解獨和大辭典』（片山正雄著、南江堂、第六版、一九二九年） Nationalsozialismus の項目なし
- 2 『雙解獨和小辭典』（片山正雄著、南江堂、一九二九年） Nationalsozialismus の項目なし
- 3 『袖珍獨和辭典』（片山正雄監修、南江堂編輯部編、一九三一年） Nationalsozialismus の項目なし
- 4 『大獨日辭典』（登張信一郎著、大倉書店、一九三三年） 国家社会主義
- 5 『雙解獨和大辭典』（片山正雄著、南江堂、第一次改訂十一版、一九三二年） Nationalsozialismus の項目なし
- 6 『雙解獨和小辭典』（片山正雄著、南江堂、第一次改訂、一九三二年） Nationalsozialismus の項目なし
- 7 『雙解獨和小辭典』（片山正雄著、南江堂、第一次改訂第十一版、一九三五年） Nationalsozialismus の項目なし
- 8 『コンサイス獨和辭典』（山岸光宣編、三省堂、第七版、一九三六年） Nationalsozialismus の項目なし
- 9 『獨和言林』（佐藤通次著、白水社、一九三六年） 国家社会主義
- 10 『ゴンドラ獨和新辭典』（権田保之助編著、有朋堂、第五版、一九三七年） 国家社会主義

- 11 『雙解獨和大辭典』（片山正雄著、南江堂、改訂増補十八版、一九三九年）Nationalsozialismus の項目なし
- 12 『木村・相良獨和辭典』（木村謹治・相良守峯共著、博文館、一九四〇年）国民（民族）社会主義
- 13 『明解獨和辭典』（石原質編、南山堂、一九四〇年）Nationalsozialismus の項目なし
- 14 『雙解獨和小辭典』（片山正雄著、南江堂、改訂第十九版、一九四一年）Nationalsozialismus の項目なし
- 15 『研究社獨和辭典』（相良守峯編、研究社、一九四七年）国民社会主義
- 16 『木村・相良獨和辭典』（木村謹治・相良守峯共著、博友社、第五版、一九五一年）国民（民族）社会主義
- 17 『研究社新獨和辭典』（相良守峯編、研究社、増補第一版、一九五二年）国民社会主義
- 18 『三省堂獨和新辭典』（三省堂編修所編、三省堂、一九五四年）国家社会主義
- 19 『研究社新々獨和辭典』（相良守峯編、研究社、一九五五年）国家社会主義、ナチズム
- 20 『大独和辭典』（相良守峯編、博友社、一九五八年）（ドイツの）民族社会主義
- 21 『新独和小辭典』（片山正雄著、片山泰雄改訂、南江堂、第四版、一九五九年）国家社会主義
- 22 『独和小辭典』（佐藤新一編、研究社、一九六〇年）国家社会主義、ナチズム
- 23 『独和言林』（佐藤通次著、白水社、改新版、一九六一年）国家社会主義、ナチズム（Z.N. の項目では「ナチ、国家（国民・民族）社会黨員」）
- 24 『独和辭典』（相良守峯編、博友社、新訂、一九六三年）民族社会主義
- 25 『独和新辭典』（三省堂編修所編、三省堂、新訂版、一九六三年）国家社会主義、（ドイツの）ナチス
- 26 『標音独和辭典』（佐藤通次・森永隆編、白水社、第六版、一九六四年）国家社会主義
- 27 『新修ドイツ語辭典』（矢儀万喜多ほか編、同学社、一九七二年）国家社会主義、国民社会主義、ナチズム
- 28 『新撰独和辭典』（杉山産七・板倉頼音編、三修社、一九七四年）国家社会主義（ヒトラー Hitler の唱えた）、ナチズム
- 29 『新独和言林』（佐藤通次著、白水社、第四版、一九七七年）Nationalsozialismus の項目なし
- 30 『大学一年生の初級独和辭典』（杉山産七・板倉頼音編、三修社、一九八二年）国家社会主義（ヒトラー Hitler の唱えた）、ナチズム
- 31 『独和大辭典』（国松孝二ほか編、小学館、一九八五年）国家社会主義、ナチズム
- 32 『独和辭典』（富山芳正ほか編、郁文堂、一九八七年）国家社会主義

- 33 『クラウン独和辞典』（濱川祥枝ほか編、三省堂、一九九一年） 国民（民族）社会主義、ナチズム
- 34 『マイスター独和辞典』（戸川敬一ほか編、大修館書店、一九九二年） 国家社会主義、ナチズム
- 35 『プログレッシブ独和辞典』（小野寺和夫編、小学館、一九九三年） 国家社会主義、ナチズム
- 36 『アポロン独和辞典』（根本道也ほか編、同学社、一九九四年） 国民（国家）社会主義、ナチズム
- 37 『独和中辞典』（菊池慎吾、鉄野善資編、研究社、一九九六年） 国家社会主義、ナチズム
- 38 『クラウン独和辞典』（濱川祥枝ほか編、三省堂、第二版、一九九七年） 国民（民族）社会主義、ナチズム
- 39 『新アポロン独和辞典』（根本道也ほか編、同学社、第三版、二〇〇〇年） 国民（国家）社会主義、ナチズム
- 40 『ポケットプログレッシブ独和・和独辞典』（中山純編、小学館、二〇〇〇年） 国家社会主義、ナチズム

独和辞典は日本のゲルマニスト、とりわけドイツ語学やドイツ文学の研究者によつて編纂され、ドイツ語を日本語に訳出する際の尺度となってきた。しかしながら、ナチス・ドイツの実体があまり知られていなかった一九三〇年代と同様に、ナチス・ドイツの実体はかなり知られるようになった戦後の日本においても、ナチス・ドイツのイデオロギーに関する訳語は必ずしも統一されていない。一九三〇年代の場合、Nationalsozialismusの項目が独和辞典に記載されるにはそれなりの時間がかかったようで、論者の知る限り、一九三三年の『大獨日辭典』（4番）¹⁴や一九三六年の『獨和言林』（9番）などを待たなければならず、当初より「国家社会主義」という表記が主流であった。つまり、ナチス・ドイツの時代に日本の新聞報道などでは「国民社会主義」と訳すのが「圧倒的主流」¹⁵だったが、独和辞典においては事情がいささか異なり、「国民社会主義」もしくは「国民（民族）社会主義」の表記は、一九四〇年の『木村・相良獨和辞典』（12番）、一九四七年の『研究社獨和辞典』（15番）、一九五一年の『木村・相良獨和辞典』（16番）、一九五二年の『研究社新獨和辞典』（17番）でようやく採用されるに至る。そして、第二次世界大戦後の独和辞典では、一九五八年の相良守峯編『大独和辞典』（20番）や一九六三年の『独和辞典』新訂（24番）において「民族社会主義」という訳語が採用されていることを除くと、「国家社会主義」という訳語が圧倒的に多い。そうした中で佐藤通次による一九六一年の『独和言林』改新版（23番）ではNationalsozialismusの訳語に「国家社会主義」を当てているが、Naziの項目では「ナチ、国家（国民・民族）社会党员」という説明をつけている。このように複数の訳語を示す例として他に一九九一年の『クラウン独和辞典』（33番）と一九九四年の『アポロン独和辞典』（36番）などが挙げられよう。つまり、二〇〇〇年までの独和辞典においては、「国家社会主義」「国民社会主義」「両者の併記」「その他」といった四分類の中で、若干の例外があるものの、「国家社会主義」という訳語が圧倒的に多い。

二〇一一年以降

- 41 『クラウン独和辞典』（濱川祥枝ほか編、三省堂、第三版、二〇〇二年） 国民（民族）社会主義、ナチズム
- 42 『フロイデ独和辞典』（前田敬作監修、白水社、二〇〇三年） 国家社会主義、ナチズム
- 43 『初級者に優しい独和辞典』（早川東三ほか著、朝日出版社、二〇〇七年） 国家社会主義、ナチズム
- 44 『クラウン独和辞典』（濱川祥枝ほか編、三省堂、第四版、二〇〇八年） 国家社会主義、ナチズム
- 45 『アクセス独和辞典』（在間進編、三修社、第三版、二〇一〇年） ナチズム、国家社会主義
- 46 『アポロン独和辞典』（根本道也ほか編、同学社、第三版、二〇一〇年） 国民社会主義、ナチズム
- 47 『クラウン独和辞典』（浜川祥枝監修、信岡資生編修主幹、三省堂、第五版、二〇一三年） 国家社会主義、ナチズム
- 48 『初級者に優しい独和辞典』（早川東三ほか著、朝日出版社、新装廉価版、二〇一四年） 国家社会主義、ナチズム
- 49 『アクセス独和辞典』（在間進編、三修社、第四版、二〇二二年） ナチズム、国家社会主義
- 50 『アポロン独和辞典』（根本道也ほか編、同学社、第四版、二〇二二年） 国民社会主義、ナチズム

上述のとおり、二十一世紀に入ると、「国家社会主義」という訳語に対する批判が相次いだ。しかしながら、近年の独和辞典においては「国家社会主義」という表記がまだ主流である。こうした中で『クラウン独和辞典』と『アポロン独和辞典』が対照的な表記変更を行う。『クラウン独和辞典』は二〇〇二年の第三版（41番）までは「国民（民族）社会主義、ナチズム」と併記し、あえて「国家社会主義」という訳語を当てなかつたが、二〇〇八年の第四版（44番）になると、一転して「国家社会主義、ナチズム」という表記に変わった。これに対して、『アポロン独和辞典』の場合、一九七二年に刊行された前身の『新修ドイツ語辞典』（27番）において「国家社会主義、国民社会主義、ナチズム」と併記していたが、一九九四年の『アポロン独和辞典』（36番）でも二〇〇〇年の『新アポロン独和辞典』（39番）でも「国民（国家）社会主義、ナチズム」という新たな併記に変え、さらに二〇一〇年の『アポロン独和辞典』第三版（46番）になると「国民社会主義、ナチズム」という表記に絞り¹⁶⁾、二〇二二年の第四版（50番）でも「国民社会主義、ナチズム」を採用したのである。

二〇一三年 和独辞典

- 51 『現代和独辞典』（ロベルト・シンチンゲルほか編、三修社、一九八〇年） 記載無し

- 52 『コンサイス和独辞典』第二版（国松孝二ほか編、三省堂、一九七六年） 国家社会主義
- 53 『和独辞典』第二版（富山芳正ほか編、郁文堂、一九八三年） 国家社会主義
- 54 『アクセス和独辞典』第三版（在間進編、三修社、二〇一二年） 国家社会主義
- 55 『Großes Japanisch-Deutsches Wörterbuch 和独大辞典』 Band 2, J-N (Hrsg. von Jürgen Stalph u. a. München: Iudicium 2015) 国家社会主義

Nationalsozialismus の訳語をめぐる独和辞典において確認できた傾向は、和独辞典でも認められる。ここでは、二〇〇〇年以前に刊行されたものや日本人ゲルマニストがかかわったドイツの和独辞典を含め、現代の代表的な和独辞典を調べたところ、「国家社会主義」の項目はあるが、「国民社会主義」の項目は見当たらない。やはり、独和辞典の影響が大きいと言えるよう。

二一 ドイツ語以外の外国語辞書

二一ー一 二〇〇〇年まで

- 56 『露和辞典』（八杉貞利編、岩波書店、一九三五年） 国家社会主義
- 57 『岩波ロシヤ語辞典』（八杉貞利編、岩波書店、一九六〇年） ドイツ国家社会主義、ナチ主義
- 58 『露日辞典』（ソビエト・エンシクロペーシア出版所、一九六四年） ナチズム
- 59 『新英和中辞典』（岩崎民平ほか編、小学館、第四版、一九七七年） 国家社会主義
- 60 『クラウン仏和辞典』（大槻鉄男ほか編、三省堂、一九七八年）（特にヒットラーの） 国家社会主義
- 61 『仏和大辞典』第三版（伊吹武彦ほか編、白水社、一九八一年） 国家社会主義
- 62 『クラウン仏和辞典』（大槻鉄男ほか編、三省堂、第二版、一九八四年）（特にヒットラーの） 国家社会主義
- 63 『リーダーズ英和辞典』（松田徳一郎監修、研究社、一九八四年） 国家社会主義ドイツ労働者党
- 64 『ロワイヤル仏和中辞典』（田村毅ほか編、旺文社、一九八五年）（ヒットラーの） 国家社会主義
- 65 『ロベール仏和大辞典』（小学館ロベール仏和大辞典編集委員会編、小学館、一九八八年） 国家社会主義、ナチズム
- 66 『クラウン仏和辞典』（大槻鉄男ほか編、三省堂、第三版、一九八九年）（とくにヒットラーの） 国家社会主義
- 67 『西和中辞典』（桑名一博ほか編、小学館、一九九〇年） ナチズム、ドイツ国家社会主義

- 68 『ランダムハウス英和大辞典』（小西友七ほか編、小学館、第二版、一九九四年） ナチズム、国家「国民」社会主義
- 69 『ジーニアス英和辞典』（小西友七ほか編、大修館書店、改訂版、一九九四年）（旧ドイツの）国家社会主義
- 70 『日本語エスペラント辞典』（宮本正男編、財団法人日本エスペラント学会、第三版、一九九八年） 国家社会主義
- 71 『エクシード英和英辞典』（三省堂編修所編、三省堂、一九九九年） ナチズム、（ドイツ）国家社会主義
- 72 『現代スペイン語辞典』（宮城昇ほか編、白水社、改訂版、一九九九年） ナチズム、国家社会主義
- 73 『クラウン仏和辞典』（大槻鉄男ほか編、三省堂、第四版、一九九九年）（特にヒットラーの）国民「国家」社会主義
- 74 『伊和中辞典』（池田廉ほか編、小学館、第二版、一九九九年） ナチズム、ドイツ国家社会主義

独和辞典以外の外国語辞書を調査した結果、まず二〇〇〇年以前に関しては、『露和辞典』（56番）の「國家社會主義」、「岩波ロシヤ語辞典」（57番）の「ドイツ国家社会主義、ナチ主義」、「露日辞典」（58番）の「ナチズム」と表記が異なる時期もあったが、『新英和中辞典』（59番）、『クラウン仏和辞典』（60番）、『西和中辞典』（67番）、『日本語エスペラント辞典』（70番）、『伊和中辞典』（74番）などのように、次第に「国家社会主義」もしくは「ドイツ国家社会主義」という訳語が主流になっていく。但し、例外的に、『ランダムハウス英和大辞典』（68番）に「ナチズム、国家「国民」社会主義」、「クラウン仏和辞典」（73番）に「（特にヒットラーの）国民「国家」社会主義」という表記があった。

二〇〇一年以降

- 75 『ジーニアス英和大辞典』（小西友七ほか編、大修館書店、第三版、二〇〇一年） 国家社会主義
- 76 『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』（郡史郎ほか編、小学館、二〇〇一年） ナチズム（ドイツ国家社会主義）
- 77 『新英和大辞典』第六版（竹林滋ほか編、研究社、二〇〇二年）（ドイツの）国家社会主義、ナチズム
- 78 『アドバンストフレイバリット英和辞典』（浅野博ほか編、東京書籍、二〇〇二年） 国家社会主義、ナチズム
- 79 『日中辞典』第二版（依藤醇ほか編、小学館、北京・商務印書館、二〇〇二年） 德国国社党¹⁷⁾
- 80 『クラウン仏和辞典』第五版（天羽均ほか編、三省堂、二〇〇三年）（とくにヒットラーの）国家社会主義
- 81 『新和英大辞典』第五版（渡邊敏郎ほか編、研究社、二〇〇三年）「国家社会主義」欄で「国家社会主義ドイツ労働者党」と表記
- 82 『ロワイヤル仏和中辞典』第二版（田村毅ほか編、旺文社、二〇〇五年）（ヒットラーの）国家社会主義

- 83 『ジーニアス英和辞典』第四版（小西友七ほか編、大修館書店、二〇〇六年） ナチズム、ドイツ国家社会主義
- 84 『ヒンデーター語』日本語辞典』（古賀勝ほか編、大修館書店、二〇〇六年） ドイツ民族社会主義
- 85 『エスペラント日本語辞典』（エスペラント日本語辞典編集委員会編、研究社、二〇〇六年） 国家社会主義「ナチス党の教義」
- 86 『クラウン仏和辞典』第六版（天羽均ほか編、三省堂、二〇〇七年）（とくにヒットラーの） 国家社会主義
- 87 『クラウン西和辞典』（原誠ほか編、三省堂、二〇〇九年）（特にヒットラーの） 国家「国民」社会主義 [nacionalsocialismo の訳語]

関連語の訳し方に差異があるので、参考までに表記する。

- nazi (形) ナチスの、国家社会主義ドイツ労働者党の (名) ナチ「国家社会主義ドイツ労働者党の」党员、ナチス支持者
- nazismo ナチズム、(ドイツ) 国家社会主義
- nazista ナチスト
- nacionalsocialista (形) 国家「国民」社会主義の (名) 国家「国民」社会主義者
- 88 プチ・ロワイヤル仏和辞典』第四版（倉方秀憲ほか編、旺文社、二〇一〇年）（ヒットラーの） 国家社会主義
- 89 『Challenge 中学英和・和英辞典』（橋本光郎ほか編、株式会社ベネッセコーポレーション、二〇一二年）〈National Socialism〉の項目なし、〈the Nazisで〉ナチ党、ナチス（ヒットラーが率いた国家社会主義ドイツ労働者党）
- 90 『プログレッシブ英和中辞典』第五版（瀬戸賢一ほか編、小学館、二〇一二年） ナチズム (Nazism)、国家社会主義
- 91 『ウィズダム英和辞典』第三版（井上永幸ほか編、三省堂、二〇一三年）（旧ドイツ・ナチスの） 国家社会主義
- 92 『ジーニアス英和辞典』第五版（小西友七ほか編、大修館書店、二〇一四年）（旧ドイツの） 国家社会主義
- 93 『オーレックス英和辞典』第二版（野村恵造ほか編、旺文社、二〇一六年） 国家社会主義、ナチズム
- 94 『プログレッシブ ロシア語辞典』（中澤英彦ほか編、物書堂、二〇一六年） ナチズム、ドイツ国家社会主義
- 95 『プチ・ロワイヤル仏和辞典』第四版（倉方秀憲ほか編、旺文社、二〇一〇年）（ヒットラーの） 国家社会主義
- 96 『クラウン仏和辞典』第七版（天羽均ほか編、三省堂、二〇一二年）（とくにヒットラーの） 国家社会主義

二〇一一年以降も「国家社会主義」の訳語がそれ以前と同様に主として採用されていた。例外は、『ヒンデーター語』日本語辞典』（84番）の「ドイツ民族社会主義」と『クラウン西和辞典』（87番）の「（特にヒットラーの）国家「国民」社会主義」にとどまる。なお、

『クラウン仏和辞典』に関しては補足説明が必要であろう。一九七八年の初版(60番)から一九八九年の第三版(66番)までは「(特にヒットラーの) 国家社会主義」という表記であったが、一九九九年の第四版(73番)になると「(特にヒットラーの) 国民(国家) 社会主義」に一時的に変更されたものの、二〇〇三年の第五版(80番)から二〇二一年の第七版(96番)まで再び「(特にヒットラーの) 国家社会主義」という記載に戻っている。

二一三 国語辞典

- 97 『新編大言海』(大槻文彦・大槻清彦編、富山房、二〇〇一年) 記載無し
- 98 『日本国語大辞典』(北原保雄ほか編、小学館、第二版、二〇〇一年) 国家社会主義ドイツ労働者党
- 99 『新明解国語辞典』(山田忠雄ほか編、三省堂、第六版、小型版、二〇〇八年) 国家社会主義ドイツ労働者党。ナチスによって代表される右翼の全体主義。
- 100 『広辞苑』(新村出ほか編、岩波書店、第六版、二〇〇八年) 国家社会主義ドイツ労働者党
- 101 『岩波 国語辞典』(西尾実ほか編、岩波書店、第七版、二〇〇九年) ナチスの政治・社会思想。国家主義、偏狭な民族主義、独裁(全体)主義が特色。
- 102 『明鏡国語辞典』(北原保雄ほか編、大修館書店、第二版、二〇一〇年) 国家社会主義ドイツ労働者党の通称(「ナチス」欄)。ナチスの政治理念またはその支配体制。ゲルマン民族至上主義を唱え、過激な全体主義と偏狭な民族主義を特徴とする(「ナチズム」欄)。
- 103 『デジタル大辞泉』(松村明ほか編小学館、定本『大辞泉』第二版、二〇一二年) 国家社会主義ドイツ労働者党
- 104 『現代カタカナ語辞典』(旺文社、電子辞書収録版、二〇一五年) ナチの信奉する国粹的國家社会主義
- 105 『旺文社 国語辞典』(山口明穂ほか編、旺文社、第十一版、二〇一七年) 国家社会主義ドイツ労働者党

以上の記載が示すとおり、国語辞典の「ナチズム」や「ナチス」の項目では、独和辞典や各国語辞書とは異なり説明的な記述になっているものの、独和辞典やそれ以外の各国語辞書と同様に「国家社会主義」や「国家社会主義ドイツ労働者党」という表記が大半を占める。『新編大言海』の場合、一九三二年から一九三七年の間に刊行された『言海』の増補改訂版ということもあり、そこには当該項目が見当たらない。こうした例外を除くと、現在日本で流通している代表的な国語辞典においては、大方の外国語の辞書と同様に、

「国家社会主義」という訳語に対する批判がいまだ反映されていないと言えよう。

二一四 百科事典

- 106 『ニューワイド学習百科事典』（学習研究社、第五巻、二〇〇二年） 国家社会主義ドイツ労働者党
- 107 『岩波キリスト教辞典』（大貫隆ほか編、岩波書店、二〇〇二年） 国家社会主義体制（ナチズム）（天野有担当）
- 108 『現代芸術思想事典』（アンドリュ・エドガーほか編、富山太佳夫ほか訳、青土社、二〇〇二年） ドイツ国家社会主義
- 109 『ビジュアル大世界史』（クラウス・ペルンドルほか編集、日経ナショナル ジオグラフィック社、二〇〇七年） 国家社会主義ドイツ労働者党
- 110 『百科事典マイペディア』（日立ソリューションズ・ビジネス、電子辞書版、二〇〇八年） 国民社会主義（国家社会主義とも訳す）ドイツ労働者党（「ナチス」欄）、国家社会主義ドイツ労働者党（「ナチズム」欄）
- 111 『ブリタニカ国際大百科事典』（ブリタニカ・ジャパン、小項目電子辞書版、二〇一六年） 国家社会主義ドイツ労働者党（「ナチス」欄）、民族（国家）社会主義（「ナチズム」欄）。
- 112 『ハイドガー事典』（ハイドガー・フォーラム編、昭和堂、二〇二二年） 国民社会主義ドイツ労働者党（轟孝夫担当）

日本における代表的な百科事典ならびにドイツ関連の記述が多い個別の事典において「ナチス」や「ナチズム」の項目で Nationalsozialismus はどのように訳出されているのであろうか。事典に関しては、確認可能な範囲で、編者のみならず、該当の項目担当者名も記した。二〇〇〇年以前に刊行された百科事典の場合、政党名を含めて言えば、『大事典 *Das*』（梅棹忠夫ほか編、講談社、一九八三年）のように「国家社会主義ドイツ労働者党」と表記が従来からある一方で、『グランド現代百科事典』（学習研究社、改訂新版、一九八三年）の「国民社会主義」や『日本大百科全書（ニッポニカ）』（小学館、一九八四年、カシオ計算機内蔵電子版二〇一四年）の「国民社会主義ドイツ労働者党」（村瀬興雄担当）という表記もある。他に『世界大百科事典』（加藤周一ほか編、平凡社、一九八八年）のように「国民社会主義ドイツ労働者党。国家社会主義ドイツ労働者党とも訳す」（中村幹雄担当）という併記もあった。こうした併記は二〇〇一年以降に刊行された百科事典にも見られるものの、表記の不統一が見受けられ、『百科事典マイペディア』（110番）の場合、「ナチス」欄では「国民社会主義（国家社会主義とも訳す）ドイツ労働者党」と併記しているが「ナチズム」欄では「国家社会主義ドイツ労働者党」とだけ示しており、『ブリタニカ国際大百科事典』（111番）の場合はいわば逆で、「ナチス」欄で

「国家社会主義ドイツ労働者党」と記載し、「ナチズム」欄で「民族（国家）社会主義」と併記している。哲学思想系の事典に関しては、『哲学事典』（林達夫ほか編、平凡社、一九七一年）、「ナチス第三帝国事典」（ジェームズ・テラー、ウォーレン・ショー著、吉田八岑監訳、三交社、一九九三年）、『岩波哲学思想事典』（廣松渉・三島憲一ほか編、岩波書店、一九九八年、山本九担当）などでは「国家社会主義ドイツ労働者党」を採用していたのに対して、比較的新しい『ハイデガー事典』（112番）では「国民社会主義ドイツ労働者党」が採用されており、詰まるところ、事典類の場合、二〇〇〇年以前の諸例を含めて言うところ、全体として訳語の不統一が辞書以上に大きい。

二一五 教科書、学習参考書

- 113 『山川世界史小辞典』（世界史小辞典編集委員会編、山川出版社、改訂新版、二〇〇四年） **国民社会主義（「ナチス」欄）、国民社会主義ドイツ労働者党（「ナチ党」欄）**
- 114 『ニューステージ 世界史詳覧』（浜島書店、改訂版、二〇〇六年） **国民社会主義ドイツ労働者党（ナチ党）**
- 115 『新選世界史B』（東京書籍、二〇一三年） **国民社会主義ドイツ労働者党**
- 116 『世界史B 一問一答』（齋藤整、東進ブックス、二〇一三年） **国民（国家）社会主義**
- 117 『時代と流れて覚える！ 世界史B用語』（相田知史ほか著、文英堂、二〇一六年） **国民（国家）社会主義党、ナチ党**
- 118 『詳説世界史』（木村靖二ほか編、山川出版社、二〇一三年） **国民（国家）社会主義ドイツ労働者党**
- 119 『世界史用語集』（全国歴史教育研究協議会編、二〇一四年） **国民（国家）社会主義ドイツ労働者党（「ナチス」ドイツとヴェルサイユ体制の破壊）欄）、国民社会主義ドイツ労働者党（「ナチ党」欄）**
- 120 『市民のための世界史』（大阪大学歴史教育研究会、大阪大学出版会、二〇一四年） **ナチ党**
- 121 『中学 歴史 日本の歴史と世界』（清水書院、二〇一五年） **国民社会主義ドイツ労働者党**
- 122 『新版 新しい歴史教科書』（杉原誠四郎、西尾幹二ほか編、自由社、二〇一五年） **ナチス党**
- 124 『高等学校 世界史A』（上田信、大久保桂子ほか編、清水書院、新訂版、二〇一六年） **国民社会主義ドイツ労働者党**
- 125 『詳説世界史』（木村靖二ほか著、山川出版社、改訂版、二〇一六年） **ナチ党、国民（国家）社会主義ドイツ労働者党**
- 126 『世界史B』（実教出版、新訂版、二〇一六年） **国民社会主義ドイツ労働者党**
- 『現代社会』（数研出版、二〇一六年） **国民社会主義ドイツ労働者党**

- 127 『最新世界史図説タペストリー』（帝国書院、第十四版、二〇一六年） 国民社会主義
 128 『アカデミア世界史』（浜島書店編集部編、浜島書店、改訂版、二〇一七年） ナチ党
 129 『詳説 世界史研究』（木村靖二ほか編、山川出版社、全面改訂版、二〇一七年） 国民社会主義
 130 『新詳世界史B』（川北稔ほか編、帝国書院、二〇一七年） 国民社会主義ドイツ労働者党
 131 『世界史B』（福井憲彦ほか、東京書籍、二〇一七年） 国民社会主義ドイツ労働者党
 132 『世界史用語集』（全国歴史教育研究協議会編、山川出版社、改訂版、二〇一八年） 国民（国家）社会主義ドイツ労働者党、ナチ党
 133 『世界史B』（岸本美緒ほか編、東京書籍、二〇一八年） 国民社会主義ドイツ労働者党
 134 『新しい社会 歴史』（矢ヶ崎典隆、坂上康俊ほか編、東京書籍、二〇二〇年） 国民社会主義ドイツ労働者党
 135 『要説世界史』（木村靖二ほか編、山川出版社、改訂版、二〇二二年） 国民（国家）社会主義ドイツ労働者党

近年刊行された教科書や学習参考書の「ナチズム」や「ナチス」の項目においては、党名表記が圧倒的に多い。但し、「国家社会主義ドイツ労働者党」という党名表記があるのは、121、126番に限られる。他に「ナチ党」もしくは「ナチス党」という表記が、120、122、128番において確認できよう。以上に対して、近年刊行された教科書や学習参考書の場合、「国民社会主義ドイツ労働者党」もしくは「国民社会主義」といういわば旗幟を鮮明にする単記表記が多い（113、114、115、123、125、127、129、130、131、133、134番）。他に「国民（国家）社会主義ドイツ労働者党」と併記する例が多いのも教科書や学習参考書の特徴と言えよう（116、117、118、119、124、132、135番）。但し、併記といっても、「国家（国民）社会主義ドイツ労働者党」という表記が一つもない点を見逃してはならない。「国民（国家）社会主義ドイツ労働者党」という併記は、Nationalsozialismus の訳語として 一般に「国家社会主義」がまだまだ流布しているものの、やはり「国民社会主義」を適切とみなす見解の表れと言えよう。

以上の状況が日本の中学高校教育にもたらす影響も見逃してはならない。というのも、現状では、Nationalsozialismus の訳語が不統一のまま、中学生と高校生は歴史の授業で「ナチス」のことを学習するからだ。辞書類では「国家社会主義」という訳語が多いのに対して、教科書類では、単記であれ併記であれ、「国民社会主義」という訳語が多い。こうなると、次のようなケースが起きてしまう。高校の歴史学習でナチズムを「国民社会主義」と学んだ学習者が、英語や国語の辞書において「国家社会主義」という表記に出くわし、更に大学で英語以外の外国語を初習外国語として学ぶ際、ドイツ語であれ、フランス語であれ、スペイン語であれ、第二外

国語の辞書を引くとやはり「国家社会主義」の表記に出くわし、こうした不統一に困った挙句に事典を引くと、それも複数の事典を引き比べると、全体として訳語の不統一が辞書以上に大きいため、さらなる混乱に陥ってしまう。このように混迷が深まる原因は、あえて単純化して言えば、辞書の執筆陣と歴史教科書の執筆陣が異なる点にある。独和辞典の場合、ドイツ語学やドイツ文学の研究者によって編纂されるのに対して、歴史教科書におけるナチズムの項目はドイツ現代史の研究者によって執筆されることが多い。つまり、ドイツ語やドイツ文学を研究する狭義のゲルマニストは「国家社会主義」を採用し、現代ドイツ史を研究する広義のゲルマニストは「国民社会主義」を採用していることになる。

二一六 「ナチズム」や「ナチス」を扱う書籍

136 『ヒトラー全記録』（阿部良男著、柏書房、二〇〇一年） 国民社会主義ドイツ労働者党

137 『世界史（下）』（ウィリアム・H・マクニール著、増田義郎、佐々木昭夫訳、中央公論新社、二〇〇八年） 国家社会主義ドイツ労働者党

138 『ヒトラーを支持したドイツ国民』（ロバート・ジェラテリー著、根岸隆夫訳、みすず書房、二〇〇八年） 国民社会主義ドイツ労働者

働者

139 『ロマン主義』（リュディガー・ザフランスキ著、津山拓也訳、法政大学出版局、二〇一〇年） 国家社会主義

140 『日本ファシズム論争——大戦前夜の思想家たち』（福家崇洋著、河出書房新社、二〇一二年） 国民社会主義ドイツ労働者

141 『ヒトラーの国民国家』（ゲッツ・アリー著、芝健介訳、岩波書店、二〇一二年） 国民的社会主義

142 『ナチのプロパガンダとアラブ世界』（ジェフリー・ハーフ著、星乃治彦ほか訳、岩波書店、二〇一三年） 民族社会主義

143 『ヒトラー演説 熱狂の真実』（高田博行著、中公新書、二〇一四年） 国民社会主義ドイツ労働者党

144 『森と山と川でたどるドイツ史』（池上俊一著、岩波ジュニア新書、二〇一五年） 国民社会主義

145 『ヒトラーとナチ・ドイツ』（石田勇治著、講談社現代新書、二〇一五年） 国民社会主義ドイツ労働者党

146 『ヒトラー 上 一八八九—一九三六 傲慢』（イアン・カーショー著、川喜田敦子訳、石田勇治監修、白水社、二〇一六年） 国民

民社会主義労働者党

147 『ヒトラー 下 一九三六—一九四五 天罰』（イアン・カーショー著、福永美和子訳、石田勇治監修、白水社、二〇一六年） 国民

民社会主義労働者党

- 148 「ナチスの「手口」と緊急事態条項」(長谷部恭男、石田勇治著、集英社新書、二〇一七年) 国民社会主義労働者党
- 149 「ナチズムの時代」(山本秀行著、世界史リブレット四九、山川出版社、二〇一七年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 150 「ファシスト的公共性——総力線体制のメディア学」(佐藤卓己著、岩波書店、二〇一八年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 151 「ドイツの右翼」(フォルカー・ヴァイス著、長谷川晴生訳、新泉社、二〇一九年) 国民社会主義「ナチズム」というルビ付き
- 152 「溺れるものと救われるもの」(プリーモ・レーヴィ著、竹山博英訳、朝日文庫、二〇一九年) 国家社会主義
- 153 「ドイツ文化事典」(石田勇治ほか編、丸善書店、二〇二〇年) 国民社会主義労働者党
- 154 「ナチス機関誌「女性展望」を読む」(桑原ヒサ子著、青弓社、二〇二〇年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 155 「第三帝国 ある独裁の歴史」(ウルリヒ・ヘルベルト著、小野寺拓也訳、角川新書、二〇二一年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 156 ジョージ・L・モッセ『大衆の国民化』(佐藤卓己ほか訳、ちくま学芸文庫、二〇二一年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 157 「ヒトラー 虚構の独裁者」(芝健介著、岩波書店、二〇二二年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 158 「ドイツ・ナショナリズム」(今野元著、中公新書、二〇二二年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 159 「ドイツ文学の道しるべ」(畠山寛、吉中俊貴、岡本和子編著、ミネルヴァ書房、二〇二二年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 160 「ヴァイマル憲法とヒトラー 戦後民主主義からファシズムへ」(池田浩士著、岩波書店、二〇二二年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 161 「ミュンヘン——芸術の首都の物語」(NHKラジオ まいにちドイツ語 二〇二二年三月号、前田良三著、NHK出版、二〇二二年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 162 「ハーケンクロイツの文化史」(ローレンツ・イエーガー著、長谷川晴生、藤崎剛人、今井宏昌訳、青土社、二〇二三年) 国民社会主義
- 163 「アドルフ・ヒトラー ある独裁者の伝記」(ハンス・ウルリヒ・ターマー著、斉藤寿雄訳、法政大学出版局、二〇二三年) 国民社会主義ドイツ労働者党
- 164 「沈黙の勇者たち ユダヤ人を救ったドイツ市民の戦い」(岡典子著、新潮選書、二〇二三年) 国家社会主義ドイツ労働者党
- 165 「ヒトラーの遺言——ナチズムは復活するのか」(永峯清成著、溪流社、二〇二三年) 国民社会主義ドイツ労働者党

「ナチズム」や「ナチス」を扱う近年刊行された書籍の場合、「国家社会主義」(137、139、152番)や「民族社会主義」(142番)という表記が若干見られるものの、「国民社会主義ドイツ労働者党」という表記が圧倒的に多い。二〇〇〇年以前の場合、ナチス・ドイツ研究者の村瀬興雄が既に一九六〇年代に「国民社会主義的ドイツ労働者党」という表記を『ヒトラー ナチズムの誕生』(村瀬興雄著、誠文堂新社、一九六二年)と『世界の歴史 十五ファシズムと第二次世界大戦』(村瀬興雄著、中央公論社、一九六二年)で用いていたが、その後は「国家社会主義ドイツ労働者党」という表記が一般的になる。教科書類に見られた「国民(国家) 社会主義ドイツ労働者党」という併記も見受けられない。しかしながら、二〇〇一年以降になると、「国民社会主義」や「国民社会主義ドイツ労働者党」という表記が明らかに増え出す。その先行例として、エルンスト・ブロッホ著『この時代の遺産』(池田浩士訳、三一書房、一九八二年)、『ヒトラーと第三帝国』(クラウス・ヒルデブランド著、中井晶夫ほか訳、南窓社、一九八七年)や『ワイマール文化とファシズム』(蔭山宏著、みすず書房、一九八六年)や『武器としての宣伝』(ヴァイリー・ミュンツェンベルク著、星乃治彦訳、柏書房、一九九五年)などがあった。中でも社会思想史系のドイツ文学研究者である小岸昭が刊行した『世俗宗教としてのナチズム』(小岸昭著、ちくま新書、二〇〇〇年)は、一つの興味深い事例を示す。同書でトーマス・マンの講演「理性に訴える」が森川俊夫訳で引用された際、森川訳(『トーマス・マン全集X』、新潮社、一九七二年)で「国家社会主義」と訳出されていたにもかかわらず、ナチズムに当たる当該箇所は著者の判断で「国民社会主義」に表記変更されたのである。¹⁸⁾ このように「国民社会主義」という表記を支持する傾向は、数多くのヒトラー関連文献を渉猟した歴史研究者である阿部良男の著作(136番)が示すように、ドイツの現代史や政治史や社会思想史などの研究者による著作において、とりわけ著しい。これらの専門分野では、Nationalsozialismusの中に認められる「国家社会主義」Staatssozialismus的な性格が重要な論点となっているものの¹⁹⁾、とはいえ敢えて「国家社会主義」という表記を用いる者はもはや皆無に近い。

以上の状況を受け、ドイツ語学研究者やドイツ文学研究者の間でも、「国民社会主義」や「国民社会主義ドイツ労働者党」という表記を採用する者が確実に増えている。例えば、『ヒトラー演説』(143番)、『ドイツの右翼』(151番)、『ナチス機関誌「女性展望」を読む』(154番)、『ドイツ文学の道しるべ』(159番)、『ヴァイマル憲法とヒトラー』(160番)、『ミュンヘン——芸術の首都の物語』(161番)、『ハーケンクロイツの文化史』(162番)などの著者や訳者がそうであろう。この結果、独和辞典関連の調査結果と併せて言えば、近年、狭義のゲルマニストの間でも、「国家社会主義」という表記をいまだ用いる者と新たに「国民社会主義」を採用する者とに分かれている。言うまでもなく、辞書には独自の方針や辞書特有の制約があることを忘れてはならない。とりわけ独和辞典のような外国語辞書の場合、より正確な語義を示す必要がある。とはいえ、佐藤卓己によって「特に辞書の責任は重大!」と注意が喚起され、「国家社会

主義」という訳出に対する批判が近年相次ぐ中で、「正確な語義」が改めて問われているのだ。Nationalsozialismusの語義に限って言えば、『アポロン独和辞典』ように原意を汲み取ろうとする立場と多くの独和辞典のように第二次世界大戦後に日本で流布した使用頻度の高い表記を示す立場とがある。別言すると、前者は近年の研究成果に基づいてプロパガンダに込められたナチス・ドイツの意図を我々に明らかにし、後者はナチス・ドイツのプロパガンダに対する日本人の長年にわたる理解を我々に示す。ドイツ語学やドイツ文学の研究者が後者の立場を今後とも支持するのであれば、近年の訳語批判に対して学術的な抗弁が必要な時期になっているのではないだろうか。

三

私たちは一九三〇年代よりむしろかにナチス・ドイツに関する深い知見をもつ。しかしながら、ナチス・ドイツの時代よりも現代の方がNationalsozialismusの訳語をめぐる混迷が、とりわけ教育現場で深まっている。その意味で、今こそ訳語の不統一について再考しなければならない。私たちは日本語を通じてナチス・ドイツという問題に対していかに向き合い、そして向き合った結果をいかに未来に伝えていくべきなのか。近年のナチス・ドイツ研究においては、「国家」の権力構造や「総統」の個人にのみ責任を追及するだけではなく、「国民」の責任も問い続けなければならないという問題意識が強く働く。こうした意識は「国家社会主義」という「誤訳」に対する異論と軌を一にする。Nationalsozialismusをめぐる訳語問題は、言葉の問題であるにもかかわらず、いや、言葉の問題だからこそ、過去と現在と未来をつなぐ。私たちの時代に行われた辞書記述は、ナチス・ドイツに対する私たちの姿勢を未来に伝える。Nationalsozialismusの訳語はいわば未来に対する私たちのメッセージとして送られるからだ。

注

- (1) ユルゲン・ハーバマス、エルンスト・ノルデほか『過ぎ去ろうとしない過去——ナチズムとドイツ歴史家論争』、徳永恂・三島憲一ほか訳、人文書院、一九九五年。
- (2) 近年、ナチスが台頭したヴァイマル末期と現代日本の政治状況との類似が問題にされている。長谷部恭男・石田勇治『ナチスの手口と緊急事態条項』、集英社新書、二〇一七年。アンドレアス・ヴィルシングほか編著『ナチズムは再来するの

- か?——民主主義をめぐるヴァイマル共和国の教訓——」、板橋拓己ほか編訳、慶應義塾大学出版会、二〇一九年。
- (3) 福家崇洋『日本ファシズム論争——大戦前後の思想家たち』、河出書房新社、二〇一二年、六七頁以下。
- (4) 佐藤卓己「訳者解説」、ジョージ・L・モッセ『大衆の国民化』、佐藤卓己ほか訳、ちくま学芸文庫、二〇一二年、三六四頁以下。
- (5) 佐藤卓己『メディア史』の成立——歴史学と社会学の間、『関西学院大学社会学部紀要』別冊、二〇一一年、一五頁以下。
- (6) 佐藤卓己『ファシスト的公共性——戦力線体制のメディア学』、岩波書店、二〇一八年、六二頁。
- (7) 長谷部恭男・石田勇治、前掲書、八六頁。
- (8) 池田浩士『ヴァイマル憲法とヒトラー——戦後民主主義からファシズムへ』、岩波書店、二〇一二年、六〇頁。同様の説明を石田勇治が既に行なっており、それによると、ナチズムは民族を軸に国民を統合する「国民主義」とマルクス主義・階級意識を克服して国民を束ねる共同体主義としての「社会主義」との融合であった。『ドイツ文化事典』、石田勇治ほか編、丸善書店、二〇二〇年、一五〇頁。
- (9) 同右、六八頁。
- (10) 今井の見解は、同僚である論者が二〇一二年十一月二日に行った聞き取り調査に基づく。
- (11) ドイツ現代史の専門家である小野寺拓也も、二〇一二年三月十四日にインターネットに掲載した記事「なぜナチズムは『国家社会主義』ではなく『国民社会主義』と訳すべきなのか「訳語」はこんなに重要だす」(<https://gendai.media/article/12781126>、参照2023-8-25)で、訳語問題を扱う。小野寺は次のように述べている、「ナチズム研究者として、長年悩んでいることがある。ナチズム(ドイツ語ではNationalsozialismus)の訳語として『国民社会主義』がなかなか社会に定着しない、ということだ」と。
- (12) 池田浩士、前掲書、六八頁以下。
- (13) 以下の文献一覧では、「国家社会主義」と「国民社会主義」の違いを明らかにするために、後者における「国民」の部分を「国民社会主義」のように太字で表記する。
- (14) 以後、リストの番号も示す。
- (15) 池田浩士、前掲書、六六頁以下。

(16) 『アポロン独和辞典』責任編集執筆者の一人であり、ドイツ文学研究者である福元圭太によれば、『アポロン独和辞典』第三版の編集委員会で「国民社会主義、ナチズム」という表記に絞ることを福元が提案したところ、反対意見が多々あったものの、慎重に議論を重ねた結果、提案が了承されたと言う。さらに福元によれば、「国家社会主義」と「誤訳」していないかどうか歴史学者たちが常に目を光らせている、とドイツ政治史が専門の熊野直樹（九州大学大学院法学研究院教授）から直接伺ったことが、提案のきっかけになった。以上の見解は、同僚の論者による問い合わせに対する二〇二一年十一月二日と七日の福元自身の回答に基づく。

(17) 德国はドイツ、国社党は国家社会主義を唱える政党のこと。

(18) 青木順三訳「理性に訴える」（トーマス・マン『ドイツとドイツ人』、岩波文庫、一九九〇年）でも「国家社会主義」と訳出されていた。

(19) 熊野直樹「ポリシェヴィズムとナチズム…二つの「国家社会主義」、『西洋史研究』新輯四十七号、二〇一八年、一〇〇—一二頁。

* 本論文は、科学研究費補助金「近現代ドイツの文学・思想における『第三の国』——成立・展開・変容——」（基盤研究B、二〇二一年度後期）に行った九州大学文学部「ドイツ文学講義VI」ならびに九州大学大学院人文科学府「ドイツ近代文学研究史特論I」の講義ノートに基づく。資料収集の際には、ティーチング・アシスタントの長光卓君（博士後期課程在学中）をはじめ多くの受講生がデータ収集に協力してくれた。また、九州大学の同僚である福元圭太氏（ドイツ文学）や今井宏昌氏（ドイツ現代史）からも貴重なコメントをいただいたことも、この場を借りて感謝を申し上げたい。